

第 41 回土木計画学研究発表会(春大会):2010.6.5~6(名古屋工業大学)

企画セッション討議内容の記録

セッション名：景観を活用した地域連携方策を考える（口頭発表、ポスター発表）
日付：6月5日（土曜日）16:00~18:45／第5会場（0232教室）
オーガナイザー：佐々木葉（早稲田大学）・岡田智秀（日本大学）
<p><プログラム構成></p> <p>（1）口頭発表セッション</p> <p>■日時；6月5日（土曜日）16:00~17:30（90分）</p> <p>■時間配分；主題解説5分、口頭発表10分×5題（合計50分）、質疑・全体討議35分</p> <p>■議論のねらい</p> <p>→投稿された5件の共通接点を見出して、景観計画と地域連携の方途を議論する。</p> <p>（2）ポスター発表セッション</p> <p>■日時；6月5日（土曜日）17:45~18:45（60分）</p> <p>■会場；第5会場（0232教室）</p> <p>■時間配分；主題解説：5分、ショットガンプレゼンテーション（個別発表）：1題3分×5題（合計15分）、ポスター前個別質疑：15分、全体討議25分</p> <p>■議論のねらい</p> <p>→投稿された5件は「景観計画の視覚化（形としての表象化＝デザインも含む）」にいずれも関連するものであることから、この取り組みに対する第三者の意見を募るとともに、景観計画の視覚化についてあり方を議論したり、意義を啓発する。</p> <p><討議内容></p> <p>当セッションは土木計画学研究小委員会に属する「地域のための景観マネジメントワークショップ」（代表：佐々木葉／早稲田大学）が企画した景観関連セッションであり、「口頭発表」と「ポスター発表」の2部構成で展開した。</p> <p>まず発表に先立ち、佐々木代表より当セッションの主旨説明がなされた。</p> <p>その内容として、近年景観法に基づく景観計画策定の機運が高まる中、その議論の対象は建築物等の色や意匠・形態のほか、電柱の地中化といった表層的な側面がクローズアップされるが、そもそも景観とは地域の暮らしの成り立ちが視覚化したものであり、その地域が持続的に生きながらえるための指標として位置付けるべきとの見解が示された。特に、ここ最近活発化した市町村合併に着目すれば、景観は行政界に捉われることなく複数の地域・地区がつながりをもつように視覚的に認知されるため、そうした自治体の景観計画にあっては、地域間の連携やコミュニティを促進させていくツールとして有効に活用していくべきであり、そのあり方の議論に大きな意義があるとの認識から当セッションを企画したとの趣旨が述べられた。</p> <p>その後、口頭発表セッションに移行した。</p> <p>このセッションでは、まず5題の発表を続けて展開し、残り時間で共通討議にはいった。</p> <p>討議では、景観計画策定に関する内容に集中した。主に、景観計画策定にあたり、専門家が中心となって取り組んでいる事例と、住民を中心としたワークショップ形式の恵那市の事例との比較を通じて、前者の事例に対しては住民への周知・理解促進方法について質疑・意見があり、後者の事例に対しては、ワークショップの意義や事後評価に対する質疑があった。特に後者の回答について</p>

は、主体的に関わった行政担当者が来場していたことから、発表者ではなく、当事者に直接回答いただくことになり、行政と地元住民だけでは意識が形骸化して計画策定には限界があったこと、このため外部有識者・学生らが参画した当ワークショップはたいへん大きな意義があったことがコメントとして述べられた。

続くポスター発表セッションでは、1題あたり3分程度の概要説明の後、発表者と聴講者が車座になって着座し、先の口頭発表セッションでの討議の継続も含めて活発な意見交換がなされた。特に、近年各地で策定されている景観計画の多くが文字中心の構成になっているとの問題提起からはじまり、景観計画の目標像のわかりやすい表現手法が論点となった。そのあり方のひとつとして、恵那市の取り組みが紹介され、「風景絵図」「風景カタログ」と称して、景観計画の将来像や地区内の景観構成要素を絵図や写真等によってビジュアルに表現することで、地域イメージが共有できる工夫を施したとする報告がなされた。

以上の2セッションを通じて、確固たる1つの回答が導き出されたとはいえないが、「景観」とは多様な意味と価値を含んだものであること、それゆえに景観計画策定にあたっては、誰しもがその内容を共通のイメージとして認識できる構成とすることが重要となること、そのためには計画内容の「見える化（ビジュアル表現）」が重要であることなどが参加者間の共通認識となった。

なお、当セッションのオプション的な取り組みとしてここ数年取り組んでいる「発表会開催地周辺の景観体験ツアー」では、当セッションでも発表があった名古屋近郊の恵那市内を対象として、20名ほどの参加者のもと、ローカル線明知鉄道の車窓景観体験や郷土料理・温泉体験を通じて大いに盛り上がったことも付記しておきたい。平成23年度は、開催地となる筑波の景観体験ツアーを企画しているところである。

【記録：岡田智秀（日本大学）】